

日本キリスト教会大阪北教会  
2016年10月23日(日) 聖日礼拝説教 牧師 森田幸男  
秋の伝道集会・オープン・チャーチ・子供と大人合同礼拝

聖書 ローマの信徒への手紙5章1～11節

1節このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたし達の主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2節このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。3節そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、4節忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5節希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6節実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。7節正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。8節しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。9節それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。10節敵であった時でさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。11節それだけでなく、わたし達の主イエス・キリストによって、わたし達は神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。

<説教> 『 苦難をさえ誇る生き方がある 』

◆今日のかねてより準備してまいりました「秋の伝道集会、オープン・チャーチ」の日であります。週報にありますように今日のプログラムは三部構成になっております。第二部で、「絵本朗読」もありますので、今日の私のお話しは長い時間を取ることはできません。

◆実は昨日の午後「加賀屋中学校3年2組同窓会」が道頓堀ホテルでありまして、行ってきました。私は大阪を長く離れておりましたので、大阪に帰って来てからの最近10年位幹事役をしています。私たちの『加中3年2組』は結束の強い良い組でした。30年位前から『加中3年2組同窓会』をしており、今年は中学卒業60周年の大きな区切りの同窓会でした。

◆その様な次第で司会進行役でもあった私は、「みんな、お互いに75年76年生きてきて、忘れがたい思い出もあると思うので、今日は、順番にそれを話してもらって、それからカラオケの方に移ることにしたいと思います。」「それでは、1番バッターで、僕から行きます。実は、今日も兵庫県の赤穂市から来てくれた森川和夫君のことです。中学3年の大晦日の夜、わが森田家は2000円のお金がなければ、年を越せないとい

うピンチを迎え、親は親なりに手を尽くしますが、万策尽き、万事休す。僕が近所の森川の家に借金に行っただ。『森川、悪いけど、おばちゃんに頼んでくれへん！2000円貸してほしいねん！』森川君のお母さんは何も聞かんと気持ちよく貸してくれました。「森川！ほんまに有難う。あの時、貸してもらへんかったら、今、こうしておられへんかったわ。森川、本当に有難う！」そんな事で、次々と、そうだったのか、そんな事があったんだと、中学卒業60年、人生75年の忘れがたい話をしてくれました。人生75年も生きて来たら、誰しもそれなりの経験がありますね。否、今日はこの北教会に初めて来た中学3年の果歩ちゃんのお友達の兄弟の顔も見えますね。子供も自殺に追いやられるほど、試練にあっている子が一杯いますね。

◆実は、私が初めて、今応援に行っています母教会の大阪西教会へ通い出したのも、中学3年のクリスマスからでした。お陰様でそれから60年、教会を離れたことはありません。18歳の高3のクリスマスに武田瑛四郎先生から洗礼を受け、20歳の春に恩師の宇田達夫先生に出会い、21歳の春に、その当時、東京世田谷区にあった、日本基督教会神学校に入学し、27歳で卒業して、孝子さんと結婚し、最初に赴任した教会が池袋にあった東京主僕教会でした。そして40歳の時、福島県・郡山の開拓伝道に転じました。

◆この池袋時代で忘れられない経験は、「恵美子さん」に悩まされた事です。本当にどれほど悩まされたかしれません！恵美子さんは生来の弱視・視野狭窄で、人の手を借りなければ歩けませんでした。駆け出し牧師の私は、朝に夕に夜中に電話で呼び出されて、駆け付けました。私だけではありません。教会の皆も色々と迷惑をこうむったのです。そんなある日の事、転機が訪れました。恵美子さんにさんざん悩まされて、わたしは後ろ向きに恵美子さんに、対応して来たのですが、ふと気が付いたのです。神様は、イエス様は、本当に、今の今まで、この私のことを心底から心にかけて下さっている事が分ったのです。すると、この厄介者の「恵美子さん」が本当に愛おしくなりました。その後恵美子さんは結婚して、ご主人に手を引かれて郡山の教会にも苦小牧の教会にも何度も訪ねてくれて、私たちを励ましてくれました。

◆週報に記しておりますように、今日来会された方でまだ聖書をお持ちでない方には、教会から聖書を贈呈致しますのでお受け取り下さい。ところで「聖書は難しい！読んでもよく分らない！」という声をよく聞きます。もっともな感想だと思います。60年以上聖書を読んで来た私も「何！聖書が言っていることは、こういう事だったのか」と気付く連続のような日々を過ごしています。そして、今、思うことは、聖書を読むときには、「「キリストはどういう人か、イエス様はどういう人か」という観点で読むのが良いと思います。私も今まで生きてきて、誰よりもイエス様とのお付き合いが一番長く親密になりました。イエス様は、私という人間の裏も表も知り尽くしておられます。その上で、愛想を尽かさず、今の今まで共に歩んで下さいました。今日の礼拝で最初に493番の讚美歌を歌いましたが、イエス様は本当に“慈しみ深い友です。”

◆この讚美歌493番は、日本人が一番よく唄う讚美歌だと思います。ホテルの結婚式でも、教会のお葬式でも、必ずと言ってよいくらい歌われます。アイルランド人の

ジョウゼフ・スクライブンという人の作詞です。彼は結婚式の前日に婚約者が、家の近くの小川で溺れて死んでしまい、喜びの結婚式がお葬式に変わるという悲劇に見舞われます。彼は傷心を抱いてカナダに渡ります。そこで孤児院に勤めます。そして、そこで、同僚の女性と出会い、結婚することになります。ところがまたも、今度は、その女性が、病気で、結婚前に亡くなります。人生には、こんな事もあるのですね。アイルランドのお母さんは、「何と不運な子だろう」と、息子ジョウゼフを思いやっ  
て落ち込み、寝込んでしまわれます。そのことを友人を介して聞いたジョウゼフが、お母さんを慰めるために書いた詩が、この493番なのです。ジョウゼフは、如何なる試練の時にも彼と共に居て、彼を支えてくれた主イエス・キリストを頼りとして、その全生涯を、孤児たちのために捧げた人です。

◆今日は説教題を『苦難をさえ誇りとする生き方がある』といたしました。皆様お気付きのように、この題は先ほど司会者によって読まれましたローマの信徒への手紙の5章3節の「そればかりでなく苦難をも誇りとします」から取ったものであります。以前の口語訳聖書では「それだけではなく、患難を喜んで」と訳されていましたが、「喜ぶ」では足りなくて「誇る」と改訳されたのであります。勿論、苦難を最初から喜び、誇るということは誰にも出来ません。しかし、一度、イエス・キリストという方を経験すれば、イエスの様に出会った人は、如何なる苦難、患難も、それがそのまま終わることはなく、それを通して、何があっても崩れない、生き方へと転じて行きます。正に「患難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生み出す事を知っています。そして、この希望は決して崩れることはありません」(森田私訳)と言っている通りです。これは使徒パウロの言葉ですね。

◆6節でパウロはこう言います。「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、不信心な者のために死んでくださった」と。10節ではこう言います。「敵であった時でさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです」と。これらの言葉で表現されているのが、いわば、パウロの『信仰の原体験』『キリストとの出会い』の経験です。この経験があれば、苦難・患難に遭遇して「苦しみつつも、試練を喜ぶ、誇る」と言えるようになるのです。私の愛唱の聖書の個所は、ローマ信徒への手紙の8章ですが、そこでパウロはこう言っております。「35節、だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。36節『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている』と書いてあるとおりです。37節、しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています」と。これは決して誇張ではありません。キリストに出会い、キリストに捕えられた者の、偽らざる真情であります。

◆今日の週報の「牧師の落穂拾い」を読んで終わりにしたいと思います。これは、アントニー・デ・メロというカトリックの神父さんの言葉なのですが、デ・メロ神父は、1987年に50代で亡くなっておられます。

何もかもなげうって 死さえもいとわないほど  
価値のある宝が見つかった時にこそ 人はほんとうの意味で生きる。

(アントニー・デ・メロ『心の歌』より)

デ・メロさんが言うところの「価値のある宝」こそ、聖書の主人公イエス・キリストにおいて示された「神の愛」です。この一事を求めて聖書を読んでください。

◆人生における苦難、苦しみは、ある日、突然、降りかかって来ます。自動車事故などもそうです。自分が運転をしていて、人を傷つけたり、時に死に至らせたりすることがあります。また自分が、自分の家族がその被害者になる事もあります。このように、災難はある日、突然、起こるのです。これは気を付けることで、ある程度は避けることができますが、どんなに注意していても、起こる時には起こります。事故、それによる災難、苦悩は、思いがけない時に起こります。それを絶対に避けるということは人間にはできません。

◆また、「自業自得」ということもあります。自分がその悲惨の原因を作って、家族を苦しみのどん底に突き落としてしまい、自分ではどうしても償うことが出来ず、解決できない悲惨の中に落ちる場合もあります。正に、「後悔先に立たず」であります。今日のパウロの場合が、正にそうで、彼は多くの人を死に追いやったのです。どんなにしても、償うことはできません。しかしそのパウロが、先ほど触れましたローマの信徒への手紙8章の末尾でこう書いておられます。「08:38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、08:39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」これがキリスト教の信仰です。信仰の勸所です。信仰は死線を越えて行くのです。信仰は、神様の愛による「死人の復活」です。

◆お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。

今日、このように、御前に、秋の伝道集会、オープン・チャーチを持つことができましたことを感謝いたします。あなたは御約束の通り如何なる時も、私たちが如何なる人間である時も、わたしたちと共に居て下さいます。そして私たちを守り通し、良き未来を切り開いて下さいます。何故、その様にして下さるのか、わたしたちの理解を越えていますけれど、あなたがそうなさって下さったので、私たち各自、今・ここにこのようにある事を許されていますことを感謝いたします。どうか、私たちが、これからの日々、このあなたの御恩寵を片時も忘れることなく、歩む者とならせて下さい。どうか、今、試練の渦中にある人、苦しみの中にあって道を見出しえないでいる人々の道になって下さい。どうか、私たちのこの大阪北教会が、闇路を照らす灯火であらせて下さい。願いつつも、今日、この集いに来られなかった人々の上にも、あなたの導きと祝福を豊かにお与えください。これらの感謝と願い愛する主イエス・キリストの御名を通し、御前にお捧げいたします。アーメン。